

助動詞「き・けり」確認テスト（過去） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 伝聞・詠嘆の過去。物語の語り出し「ありけり（～があった）」は、語り手が直接見たわけではなく言い伝えとして語る場面なので「けり」が使われている。

問2 終止形。「ありけり。」と句点で文が言い切られているので、「けり」は終止形。

問3 連用形。ラ変動詞「あり」の連用形は「あり」。下に連用形接続の「けり」が付くので、「あり」は連用形になっている。

問4 (例) 今となつては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。／「けり」は伝え聞いた過去なので「～がいた（ということだ）」と訳す。

問5 (例) 昔、(ある) 男がいた。

問6 直接体験した過去。「人の問ひし」は「(ある) 人が問うた」の意味で、語り手がその場で見聞きした出来事として述べているため「き (の連体形し)」を用いる。

問7 連体形。「し」は直後に体言「とき」が続いているので連体形。(過去の助動詞「き」は連体形が「し」となる。)

問8 連用形。ハ行四段動詞「問ふ」の連用形は「問ひ」。下に連用形接続の「き (の連体形し)」が付くので、「問ひ」は連用形になっている。

問9 (1) 連体形 (2) 「ける」の直後に助詞「に」が続いており、この「に」は連体形に接続するため。(連体形「ける」+接続助詞「に」の形。)

問10 (1) 已然形 (2) 直前に係助詞「こそ」があり、係り結びの法則によって、文末(結び)が已然形「けれ」になっているため。

問11 未然形。「せ」の直後に助詞「ば」が続き、「～せば…まし」で「もし～だったら…だろうに」という反実仮想を表す。この「ば」は未然形に接続するので「せ」は未然形。(過去の助動詞「き」の未然形は「せ」。)

問12 (例) もし (この世の中に) まったく桜がなかったら。／「なかり」は形容詞「なし」の連用形、「せ」は過去の助動詞「き」の未然形、「ば」は仮定を表す接続助詞で、「～せば…まし」の反実仮想。

問13 直接体験した過去。「かけし (=掛けた・測った)」は、過去に自分が実際にしたこととして述べているので「き」。幼いころに二人で背くらべをした思い出を、直接の体験として回想している。

問14 イ (～たにちがいない／～たらしい=過去の推定)。「けらし」は過去の助動詞「けり」に推定の助動詞「らし」が付いて変化した形で、「～たらしい・～たにちがいない」と過去の事柄を推定する意味になる。

問15 伝聞・詠嘆の過去 (ここでは気づき・詠嘆)。「来にけるかな」は「(こんなに遠くまで) 来てしまったのだなあ」と、旅の途中でふと気づいて感動する気持ちを表しており、詠嘆の「けり」である。

問16 連体形。「ける」の直後に終助詞「かな」が続いている。「かな」は連体形に接続するため、「ける」は連体形。

問17 (例) 思いめぐらすと、(都から) 限りなく遠くまでも来てしまったのだなあ。／「ける」は詠嘆をこめた過去なので「～たのだなあ」と訳すとよい。

問18 イ (形容詞「ものぐるほし」の已然形の活用語尾)。「ものぐるほし」はシク活用形容詞で、已然形は「ものぐるほしけれ」。係助詞「こそ」を受けて已然形で結んでいる (係り結び)。語尾の「けれ」を過去の「けり」と取り違えないこと。

問19 連用形。過去の助動詞「き」は、原則として直前の語 (活用語) の連用形に接続する。

問20 連用形。過去の助動詞「けり」も、原則として直前の語 (活用語) の連用形に接続する。

問21 (1) せ (2) しか。過去の助動詞「き」は〈せ・○・き・し・しか・○〉と活用し、未然形「せ」と已然形「しか」だけが特別な形をとる (連用形・命令形はない)。

問22 ア・イ。アの「問ひし」、イの「かけし」の「し」は、いずれも下に体言が来る、または連体修飾となる過去の助動詞「き」の連体形。ウの「けらし」の「し」は「らし」の一部であって「き」ではない。エの「うつくし」の「し」は形容詞の終止形の語尾であって助動詞ではない。

問23 (例) 「き」は、話し手・書き手が自分で直接体験した過去の出来事を回想して述べるのに用いる (直接過去)。「けり」は、人から伝え聞いた過去の出来事を述べたり、今まで気づかなかったことにハッと気づいた驚き・感動 (詠嘆) を表したりするのに用いる (伝聞・詠嘆の過去)。
